

霧島市「今週の一問」中二国語 三月七日版  
令和三年度 全国学力・学習状況調査問題から

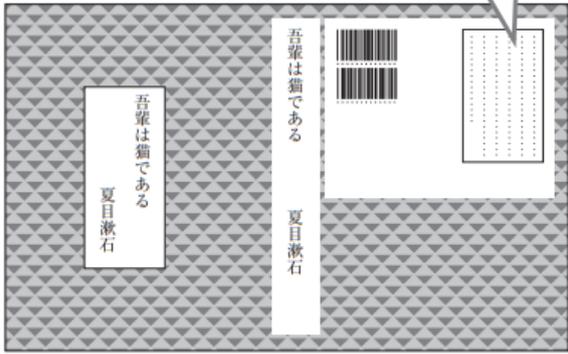


1

次は、夏目漱石の作品「吾輩は猫である」の本のカバーに書かれている【紹介】と、【文章の一部】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【紹介】

中学教師の苦沙弥先生の家で暮らす猫「吾輩」から見れば、世の中は全くもって滑稽そのもの。周囲の様子を観察し、様々に評価する。ユーモアあふれる長編小説である本作は、漱石が三十八歳のときに発表して以来、多くの読者に愛されてきた。今なお、多くの人の共感を呼ぶ名作。



〔ここまでのあらすじ〕 苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶島で黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋（人力車を引く人）に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶島の中で寝ころびながら、いろいろな雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。

「おめえはいままでに鼠を何びきとったことがある。」

智識は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇氣とにいたってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はとうとうと思うって、まだとらない」と答えた。

黒は、彼の鼻の先からびんとつばつばっている長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけどこか足りないところがあって、彼の気焰を感じたようにこの鳴らして謹聴していれば、はなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸をのみこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いつそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいふんとうたろう」と、そそのかしてみた。

果然彼は、墻壁の欠所に啞喊してきた。

「たんとでもねえが、三、四十はとつたろう」とは、得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でもいつでも引き受けるが、いたちってえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつて、ひどい目にあった。」

「へえ、なるほど」と、あいづちをうつ。

黒は大きな眼をばちつかせて、いう。  
「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはいこんだら、おめえ、大きないたちの野郎がめんくらって飛びだしたと思ひねえ。」

「ふん」と感心して見せる。

「いたちってけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしょうって気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追いこんだと思ひねえ。」

「うまくやったね」と喝采してやる。

「ところがおめえ、いざってえ段になると、やつめ最後っ屁をこきやがった。くせえのくさくねえのって、それからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ。」

彼はここにいたって、あたかも去年の臭気を今なお感ずることく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。吾輩も少々気のどくな感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思つて、

「しかし鼠なら、君にいらまれては百年目だろう。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにふとって色つやがいいのだろう。」

黒のごきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも反対の結果を呈出した。彼は啞然として大息していう。

「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたって——いってえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人のとつた

B

鼠をみんな取りあげやがって、(注6) 交番へ持ってゆきあがる。交番じゃ、だれがとったかわからねえから、そのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十錢くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありやしねえ。おい、人間でものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこったようすで背中の毛を逆だてている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いいかげんにその場をごまかして、うちへ帰った。

このときから吾輩は、けっして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になって鼠以外のごちそうをあさってあるくこともしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。

(夏目漱石「吾輩は猫である(上)」による。)

(注1) 気焰ニ燃え上がるような盛んな意気。

(注2) 御しやすいニ思うように扱いやすい。

(注3) お茶をにごすにしくはないニごまかすのが最もよい。

(注4) 果然彼は、墻壁の欠所に呐喊してきたニここでは、予想どおり「黒」が誘いに勢い込んで乗ってきた、ということ。

(注5) 喟然として大息してニため息をついて嘆いて。

(注6) 交番へ持ってゆきあがるニ当時は、公衆衛生上、鼠退治を奨励し、とった鼠を交番で買い上げた。

— 線部①「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までのの中から1つ選びなさい。

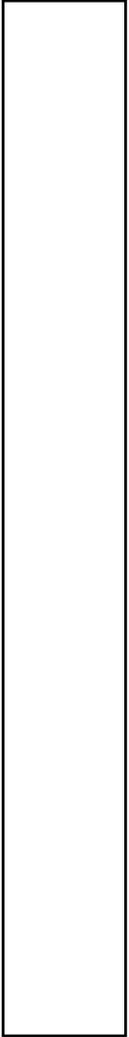
- 1 コツをつかんだ。
- 2 息を吸い込んだ。
- 3 ため息を抑えた。
- 4 発言を我慢した。



二 〓 線部 A 「喝采してやる」、〓 線部 B 「とった」のそれぞれについて、「吾輩」の動作である場合は 1、「黒」の動作である場合は 2、「亭主」の動作である場合は 3 を選びなさい。



三 〓 線部 ② 「反対の結果を呈出した」とありますが、このことは「黒」のどのような様子から分かりますか。【文章の一部】の中から探し、抜き出しなさい。



四 【紹介】に~~~~線部「様々に評価する」とありますが、【文章の一部】では、「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのような接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の条件1と条件2にしたがつて書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 【文章の一部】から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書くこと。

条件2 条件1のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。

--	--	--	--	--



1

一

二  
A

1

B

2

三

(例) 彼は喟然として大息している。(。)

四

(例) 「はなはだ御しやすい猫である」と評価しており、「吾輩」は「黒」

の機嫌をとるような接し方をしていることが分かる。私は、このよう  
な「吾輩」の接し方はとても賢いと思う。